

△そぞろごと▽ 尾形明子

—『青鞥』雑感—

われは。われは。

山の動く日来る。

かく云へども人われを信ぜじ。

山は姑く眠りしのみ。

その昔に於て

山は皆火に燃えて動きしものを。

されど、そは信ぜずともよし。

人よ、ああ、唯これを信ぜよ。

すべて眠りし女今ぞ目覺めて動くなる。

漂う。

そして、その巻頭を飾ったのが、与謝野晶子の十二連からなる詩「そぞろごと」であった。

それは、平塚らいてうの「元始、女性は太陽であった。眞正の人であった。今、女性は今である。他によつて生き、他の光によつて輝く、病人のような蒼白い顔の月である」という美しいリフレインに飾られたマニフェストと共に、女性の覚醒を促し、女性が自分自身の声で言葉で歌うことを求めたのである。

強固な家族制度が、女性を陽の射し込まない台所に釘付けにし、妻にのみ過酷な姦通罪が当然とされ、更には三十三年に発布された治安警察法第五条によつて、女性の政治結社加入が禁じられていた時代であった。四十三年の大逆事件後の次第に鎖されていく空気の中で、いわば幾重もの重さに喘ぎや溜息までもひそやかにつましくなればならなかった女たちに、晶子はほとぼしるように叫ぶのである。

五年前、「みだれ髪」にその奔放でひたむきな青春を歌いあげた晶子も三四歳。四女宇智子を出産し、妻として、母として、歌人として、その他いく通りもの生のいずれにも倦むことを知らないエネルギーと情熱を傾けながら、しかもなお、自己の内部分で煮えたる溶岩の爆発の日を予感するのである。

明治四十四年九月、女性のための女性の手による雑誌「青鞥」は発刊された。黄土色地に、女の立像をボドラー風に描いた表紙は長沼智恵子の手による。豊かな腰と、

かっつきりと強い輪郭をもったそのプロフィールには、成熟した女のエロティシズムさえ

一人稱にてのみ物書かばや。

われは女ぞ。

一人稱にてのみ物書かばや。

一人稱にてのみ物書かばや。

女であるところから、女である私の場か

ら、心情から物を書こうという誘い。たと

え晶子の叫びが、その狂おしいほどに激しい歌への情熱から発されたものであったとしても、多くの鬱々と日々を送る女性たちにペンを取らせるに十分な、それは魅力ある誘いであり励ましてであった。暗いランプの下で、彼女たちはペンを走らせる。

折しも、「蒲団」を経た自然主義は、自己の日常生活の叙述や告白が、そのまま文学になり得るかのような錯覚を人々に与え、前年、すでに創刊されていた『白樺』は、天衣無縫な個我を誇らかに歌っていた。ドラマやロマンの構築はできなくても、閉ざされた暗い情緒や感覚を吐き出すことはできる。苦渋と憂いに満ちた青春の日々を日記にでも書くように、彼女たちは切々と綴るのである。

『青鞥』に香り高い文学を求めることは難しいが、それらの作品を貫くリアリティは、生半可な私小説作家の到底描き得ない女の生活と感性とを浮き彫りにしたのだ。

われは愛づ。新しき薄手の玻璃の鉢を。
水もこれに澁ふれば涙と流れ。

花もこれに投げ入るれば火とぞ燃ゆる。
愁ふるは、若し粗忽なる男の手に碎け去らば――
素焼の土器より更に脆く、かよわく。

文字による定着は、それまでただエモーショナルにのみ捕らえていた女であること
の不安や怒り、ひたひたと押しこめる政治
的社会的抑圧を、意識化させる。置かれて
いる状況の認識と不満。差別への反抗。自
由な世界を求めて、彼女たちは家を離れ、
ただひたすらはばたこうとする。

しかしながら、そのはばたきが、やがて
彼女たちに教えたのは余りに厚い壁と、彼
女自身に巢喰う女という性の特殊性であっ
たのかも知れない。

豊かな才能と余りあるエネルギーとで、
女であることの社会的差別を飛び越した晶
子であったが、彼女も又、男とは異なる性を
いとおしみと悲しみの中で歌わなければな
らなかつた。脆く、あやしく、揺れ動いて
やまない性。長い歴史に、いつの間にか作
られた幻影でしかなかったとしても、それ
をふり切って進むには彼女たちは余りに自

己の内部に沈潜し、その翼は弱過ぎたのだ
った。

高らかに「山の動く日來る」と言い切つ
た晶子だったが、詩は次のように終る。

夏の夜のどしゃ降の雨、
わが家は泥田の底となるらん。
柱みな草の如く撓み、
そを傳ふ雨漏の水は蛇の如し。
寝汗の香、かなしさよ。よわき子の齒ざ
しり。

青き蚊帳は蛙の喉の如く脹れ、
肩なる髪は鹿子菜の如く戦ぐ。
この中に青白きわが顔こそ、
芥に流れて寄れる月見草なれ。

張り詰めた糸は、日常性の中で撓む。晶
子自身の理想と現実がこの「そぞろごと」
であろうか。だとすると、それは、女流の
天才を求めながら、結局、身の上話の範囲
から出ることができなかった文芸誌『青
鞥』を象徴しているともいえよう。

△以上▽